



日台稻門会

NEWS LETTER 第17号

平成22年(2010年)民国99年

早春号

発行 日台稻門会事務局

編集 岩永・小野間・齋藤

台湾はランタン祭も過ぎ初夏の気候だそうです。日本もようやく桜の花がほころび始め、春の気配が感じられる今日このごろです。春の到来とともに、日台稻門会ニューズレターをお届けします。

◇ 日台稻門会・台湾校友会NEWS ◇

早稲田大學台灣校友會2009年大會 盛大に開催される

(平成21年11月28日(土) 台北・國賓飯店 12階 樓外樓)

早稲田大學台灣校友會2009年度大會が11月28日土曜日、台北の國賓飯店12階樓上『樓外樓』で開催されました。また今年には台灣校友會3年に一度の理・監事改選期にあたり、選挙の投開票が総会と並行しておこなわれました。

当会からは岩永会長はじめ、小野間幹事長、大嶋武幹事、江正殷幹事、譽清輝さんが参加。また沖縄からは藤井素介さん、休会中の川村淳一さんもはるばるミャンマーから駆けつけてくれました。同じく休会会員で、現在台北稻門会で活躍されている羽原美紀さん、小林重雄さんの元気な顔もありました。それに齋藤が家族一同6名で訪台し、参加しました。

総会は定刻よりやや遅れて、幹事・涂世俊さんの司会でスタート、台灣校友會・董炯熙会長、来賓の白井克彦総長の挨拶、日本から参加の各稻門会(日台、行政書士、千代田、横浜、福岡)との禮品交換および各代表の挨拶、台灣三田會・陳田柏会長の挨拶と進み、最後に鄭文哲総幹事により挨拶と台灣校友會の業務報告及び本大会の選挙についての説明があり、総会を終了しました。当会からは礼品として大吟醸をお贈りし、駐日代表處・許世楷前代表が「今すぐ呑みたい」と開瓶を所望されるほどの大好評を博しておりました。

引続き台北稻門会・山田教会長の音頭で乾杯がおこなわれ、第二部の懇親会がスタートしました。また開宴後も選挙開票が続き、選任された理・監事が董会長から白井総長に紹介されていました。

約200名の出席者同士、彼方此方で交歓がおこなわれ、メインテーブルでは駐日代表處・許世楷前代表、亞東協會・羅福全前会長、董炯熙会長、謝南強名誉会長、新光人壽・吳東進董事長、統一超商・徐重仁總經理の皆さんがお元気な姿で歓談されておりました。

日本からの留学生や、日本での留学が終わり台湾で就職された陳韻文さん、黄巧如さん(台湾研究所)など若い方々も大勢参加されており、華やいだ雰囲気を感じていました。

宴も終わりに近づき、恒例の行政書士稻門会・山下政行副会長の応援指導で校歌を高らかに歌いあげ、盛会裡に閉会しました。なお次回の総会は本年11月末、高雄で開催の予定です。

□出席者(敬称略)

【大学】白井克彦総長、江夏健一・前常任理事、福田秋秀・校友会代表幹事、鈴木義秀・秘書課課長、藤井公博・校友課課長、江正殷・国際部副部長、大谷俊昭・北京及び上海教育研究中心所長、岡本宏一・台北国際交流中心主任、永井猛・商学部大学院教授

【稻門会】台北稻門会(山田会長、齊藤征二、長田光生、片倉佳史・観光日文嚮導、羽原、小林)、日台稻門会(岩永会長、小野間幹事長、譽清輝、藤井、川村、齋藤)、行政書士稻門会(能登八郎会長、山下政行副会長、酒井健爾事務局長、大嶋武幹事)、千代田稻門会、横浜校友会、福岡稻門会(江口宏嗣幹事長)、茅ヶ崎稻門会(落合護、堀口哲史)

【三田会】台灣慶應三田會・陳田柏会長
(幹事・齋藤記)

※参考までに理監事選挙結果

【理事】北部：董炯熙、方仁惠、陳光敏、鄭文哲、林本章、林文雄、涂世俊、吳昕昌、黃一桂、陳昭明、張慧莉、中部：劉清標、余溪水、蔡啟清、南部：李哲朗、林滄智、蘇銘峰(全17名)

【監事】北部：陳錫湖、蔡榮郎、陳英凱、中部：陳石明、南部：鄭又璋(全5名)

(なお、会長を含む幹部の選出は、後日開催される理監事会で決定されるとのことです。)



董炯熙会長に大吟醸を手渡す当会・岩永会長

早稲田大学台湾校友会総会 前夜祭報告

(平成21年11月27日(金) 遠東国際大飯店)

早稲田大学台湾校友会総会は11月28日(土)台北国賓大飯店で開催されました。

例年その前夜、台北稲門会主催で日本から訪台する稲門会との前夜祭が開催されております。今年は台北稲門会の重鎮で、台湾で起業し在住40年の萩谷氏のご子息結婚式に参列するという趣向で27日夜、遠東国際飯店で開催されました。

台湾の結婚式は日本と大分違い、形式的な挨拶は無く新郎新婦のお披露目为中心で、出席者全員でお祝いするスタイルです。萩谷氏は私が赴任した時、台北稲門会の会長、西南扶輪社の社長を務められており、校友を始め台湾ビジネス界にも広く知られた存在でした。従って出席者も亜東関係協会、台湾校友会、台北稲門会、西南扶輪社、漢帥企業集団重役、社員等多士済々で、顔見知りの方々も多く参加されていました。

西南扶輪社元社長の鐘招榮氏による新郎新婦の紹介で開宴し、指輪の交換、新郎挨拶、萩谷さんからのお礼の挨拶などが北京語で行われ、参加している日本人のために会場内のスクリーンに日本語訳が映し出されるという国際色豊かな結婚式でした。

私は台北稲門会幹部、早稲田大学台北、北京交流中心の所長等とご一緒の席で、帯同した校友二人とともに

に楽しく歓談し、また美味しい料理とお酒を堪能させて頂きました。又赴任中所属していた西南扶輪社の友達とも久しぶりに再会し、乾杯、乾杯の連続で同窓会に出席しているような錯覚にとられました。

披露宴を通じ、長女に引続き長男が相思相愛の伴侶を得、更に会社経営も順調と、安心感と満足感に溢れた萩谷ご夫妻のお姿がとても印象的でした(小野間記)。



新郎新婦と共にお礼の挨拶をされる萩谷ご夫妻

早稲田大学台湾校友会総会 娯楽活動(ゴルフ)参加報告

(平成21年11月29日(日) 老淡水)



1番ホールでの記念撮影

早稲田大学台湾校友会総会翌日、ゴルフと観光の娯楽活動が行われました。私はゴルフに参加しましたので状況を報告します。

ゴルフは5:30集合、6:00スタートというこの時期日本では考えられない早い時間の開催でした。場所は名門台湾ゴルフ場・老淡水で、集合時間は未だ夜明け前の早朝、薄暗い1番ホールの上空には龍の姿

に似た雲がかかり、星が見え幻想的でした。

この日白井総長、台湾校友会董会長以下26名の校友が集まり、7組に分かれ定刻漸く明るくなったコースを順次スタートした。

11月末ながら南国台湾の芝は青々としており、早朝のため少し寒い感がありましたが半袖でプレー出来るゴルフ日和でした。

私は日本から帯同した茅ヶ崎稲門会の校友と3サムで6組目にスタートしました。

駐在時代、毎月第一土曜日に淡水で開催される「龍子会」(辰年の会、私は巳年ですが巳は小龍で入会が許可された)でプレーした懐かしい思い出に浸りながら楽しくプレーしました。

淡水特有の強い風、長い距離、癖のあるグリーンと難しい条件が揃っていますが、何度回っても素晴らしいコースの印象です。

早いスタートでもあり、11時にはホールアウトし、シャワー後台湾校友会のご好意によりクラブハウスのレストランで、昼食を兼ねた懇親会のお持て成しを受けました。

参加者及び事務局が3つのテーブルに分かれ、思い出にプレーを振り返りながら、台湾料理と本場の紹興酒に舌鼓を打ちました。素晴らしいコース、気の合った仲間とのプレー、プレー後の美味しい料理と歓談、三拍子揃った娯楽活動でした(小野間記)。

早稲田大学台湾校友会総会 観光参加報告

(平成21年11月29日(日) 新竹)

2009年台湾校友会の翌日、恒例となっている娯楽活動が、観光コースとゴルフコースに分れて行われました。私は前者に参加しましたので、新竹周辺の歴史スポットを散策して回ったその様子について、ささやかなご報告をさせていただきます。今回の観光コースも、昨年同様に当地在住で台湾に関する多数の著作を書いておられる「片倉佳史」氏にガイドとして、参加していただきました。

朝9時前に国賓大飯店を出発した我々のバスは、まず新竹市への途中にある竹東に向かいました。この一帯では、かつて石灰石や石油が産出され、戦前の一時期にはセルロイドの原料となる樟腦の生産でも世界一を誇ったことがあったとのこと。最初の散策地として下車した日本の神社遺跡も、鉱山の安全を祈願して私的に建てられたために、運よく完全な破壊を免れて現在でも鳥居の一部等が残ることになったそうです。

その後、1907年に日本人とその家族が惨殺された「北埔事件」が起きた土地、北埔の客家レストランにて客家料理を賞味しました。客家とはご承知のように、漢民族とは別の独自の言語・文化をもち、有能な人材を輩出している少数民族です。客家料理の説明を片倉氏から伺いながらの昼食でしたが、味は日本人の口にも合ったため、3～40名程度の参加者が楽しい

ひとときを過ごしました。

午後2時ごろ、台湾のハイテク産業の集積地である新竹市に向かいました。新竹は半導体等のハイテクだけではなく、清国時代の古都として、また「風城」といわれるように風の強い町としても有名ですが、今回は市内各所に残る日本の統治時代からの建築物等を見学しました。

1913年に完成されたドイツ風ネオバロック様式の新竹駅、赤レンガと黒瓦に覆われた新竹市政府庁舎(旧新竹州庁)、消防博物館(旧新竹消防署)、旧新竹信用組合、新竹市立電影博物館(旧新竹有楽館・映画館)は全て、戦前に建築されたものであり、現在でも使用されています。また、最後に300年前につくられた迎曦門という城門も見学しました。

こうして当日の日程を終了して帰途に着けたのは午後4時過ぎとなり、また、途中ではかなりの道路渋滞も予想されたため、参加者の多くは台湾新幹線の新竹駅から午後5時台の新幹線に乗って戻ることとなりました。一日中好天と穏やかな気候に恵まれた、有意義な歴史散策の一日となりました。この観光コースを企画、実行していただいた皆様に深く御礼申し上げます。(ミャンマーより参加：川村記)



○ お知らせ ○

□ 謝南強名誉会長が早稲田学報に寄稿されました

「台湾野球の父 謝國城」早稲田学報 2009 December 1178 38 ページ

■《訃報》台北稲門会会長・山田敦氏のご母堂様が昨年11月30日、ご逝去されました。心よりご冥福をお祈りするとともに、謹んでご連絡申し上げます。なお岐阜にて12月1日に通夜、12月2日に告別式が執り行われました。日台稲門会からは弔電を打電いたしました。

当会共催「海角七号」映画上映会報告

台湾で空前のヒット作となった映画「海角七号」の日本公開に先駆けて早稲田大学で試写会が開催され、大勢の学生観客に混じり日台稲門会メンバーも観賞しました。

台湾では「観たか？」ではなく「何回観た？」が合言葉になるほどのブームになりました。私自身も台湾で2回観て感激、この試写会で3回目となりましたが、やはり日本語字幕があると更に感激しました。

この試写会は興行側からの依頼に基づき台湾研究所が主催し、日台稲門会も共催したものです。会場の22号館201教室は満員で、欧米・アジア各国の留学生も多数参加しました。

上映前に映画監督の酒井充子氏がこの映画の背景となった、日本時代の台湾やその後の日台交流、台湾の社会構成、この映画の製作過程や監督・脚本の魏徳聖氏の紹介などをわかりやすく解説されました。

この解説がなければ学生たちはいきなり映画を見ても理解できない部分が沢山あったのではないかと、酒井氏のお話に感謝です。なお、酒井氏はご自身で「台湾人生」という映画を製作され、まもなく公開予定です。

「海角七号」については日本のマスコミでもかなり採り上げられました(例:1月8日付け日経夕刊、1月21日産経、ほか多数)。

台湾ではグランプリを受賞し、海外でも多数の映画賞を受賞しています。

この映画はどのようにして台湾の人たちの魂をゆさぶったのでしょうか? 私なりに解釈してみたいと思います。

まず「海角七号」という由来ですが、これは戦前日本時代の屏東県恒春にあった地名という設定です。

日本の敗戦により強制引揚者を満載した船に若い日本人教師が乗船します。台湾人の教え子で恋人であった「小島友子」にあてて船中で手紙を書き続けます。

しかしこの手紙は投函されないまま60年近い歳月を経て、男の死後、遺品の中からこれを見つけた娘が、若い女性を写した古い白黒写真と7通の手紙を「台湾恒春郡海角七号・小島友子様」へ郵送します。

ただしこのくだりは引揚船のみの映像で、手紙の切々たる内容は日本語のナレーションで背景として読まれるだけです。観る人は戦前の日本時代の台湾や、日本人の強制引揚の時には台湾人の乗船は不可能だったことなどの、記憶や知識を総動員して理解することになります。

一方、台北という大都会で音楽家としての夢破れた主人公・アガ(阿嘉)がギターをたたきつけて粉々に破壊

昭和38年・第一政治経済学部卒業 渡邊 義典

し、深い傷心を抱いて古ぼけたオートバイに乗って故郷の恒春へ帰るところからストーリーが始まります。

彼の父は既に亡く、故郷には母が一人で住んでいます。町のボスで町議会議長の洪国栄という男がやもめ暮らしで、アガの母と再婚前提で付き合っていることは町の誰もが知っています。これもアガにとっては故郷への足を重くさせるのです。

帰ってきたアガに職を持たせるべく議長は郵便局の仕事をさせようと工作します。

80歳の配達員ボー(茂)爺さんが交通事故にあったのを機会に、アガは臨時配達員になります。

アガはいやいやながらふてくされて郵便配達を始めます。

その郵便物の中に「海角七号・小島友子様」宛ての郵便物があるのですが ——

恒春の海岸の眺望を独占する都会資本のホテルが観光客誘致のために日本の有名歌手「中孝介」を呼ぶイベントを計画します。このイベント宣伝のための外人モデル一行のマネジメントで悪戦苦闘するのが台北でイベント会社に就職した日本人の遠藤友子という若い女性です。予想外の出来事の連続で遠藤友子はキレまくります。

ホテルの経営者は「中孝介」の前座として台北からバンドを呼ぶことにしました。

このマネジメントも遠藤友子の仕事です。

これを聞きつけた町のボスの議長はホテルに乗り込んで「この美しい眺望は街の人のものだ! 街の人を締め出してよそ者の観光客が独占するのはけしからん。前座のバンドは街の人たちから公募してやらせろ!!」と強談判します。

もちろん議長の腹の中ではアガにやらせることが目的です。

ホテルには商売熱心な客家人のマラサン(馬拉桑)が地酒「マラサン」のセールスで入り込みます。

遠藤友子もこのホテルに泊まっているのですが、ホテルのメイド(これが曲者)と衝突します。遠藤友子にとっては面白くないことばかりです。

というようなお膳立てで、映画はテンポよくハチャメチャに展開していきます。

台湾人、外省人、客家人、原住民、日台混血児、日本人が入り混じり、台湾語、北京語、原住民語、客家語、日本語がそのまま入り乱れ、80歳のボー爺さん(月琴奏者として人間国宝)から小学生のダダまで老壮靑少が

それぞれ重要な役割を演じます。

アガと遠藤友子との突っ張りあいも見ものです。

そしてアガが作詞作曲する「国境の南（ジャズのスタンダードナンバーでフランク・シナトラが歌ったものとは別物です）」や、それに「野ばら」が北京語と日本語で効果的に歌われます。

海角七号宛ての手紙は映画の要所要所でナレーション（日本語）で流れます。

「友子許しておくれ。君を捨てたんじゃないんだ。泣く泣く手放したんだ」

日本人らしい几帳面な遠藤友子が、すべてにアバウトな台湾人にキレまくり、突っ張ったアガはなにかという警官と喧嘩を始めます。

ボスの議長はアガをまともにさせようと四苦八苦。

果たして、小島友子宛のラブレターは届くのでしょうか

この映画は今の台湾の地方都市の様子を見事に切り取っています。

しかも、台湾人に通底している日本時代からのさまざまな思いや、現代の日本女性（遠藤友子）と台湾人の行き違いなど、台湾にいればいつでも目にし、話に聞くよ

「海角七号」が本になりました。ノベライズですから映画の背景が実によく判ります。

新宿) 紀伊国屋の1階、台湾コーナーで見つけました。勿論アマゾン、コムでも入手可能と思います。

まずは取り急ぎお知らせまで。(齋藤)

うな雰囲気の中でストーリーが進んでいきます。

観客は映画が始まるとすぐに感情移入してしまうのです。

観る人によって感激する場面はそれぞれ違っているかもしれません。

映画の中ではさまざまな言語がポンポンと出てきます。

手紙のナレーションはすべて日本語ですから、台湾の観客は日本語も理解しなければなりません。

私たちが恒春に行つてすぐにもお目にかかれるような街の様子がナマのまま出てきます。1969年生まれの若い魏徳聖監督の手腕はすばらしいものです。

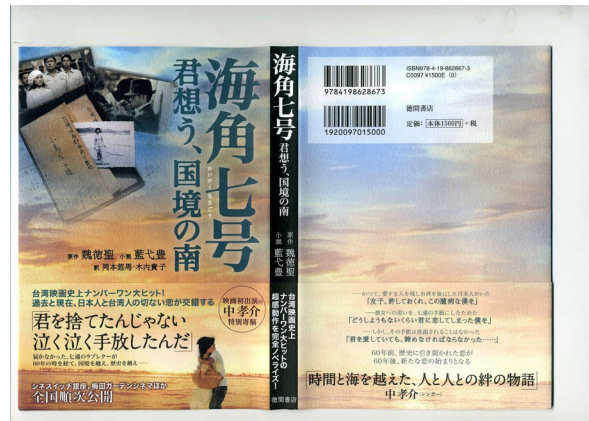
また、遠藤友子を熱演した女優の田中千絵は北京語を駆使しての体当たり演技で大好評で、一躍大スターの仲間入りをしました。

試写会は学生たちの大拍手で成功裡に幕を引きました。

なお、中華人民共和国ではこの映画は「あまりにも親日的」と批難され、輸入禁止とのことです(執筆時現在)。

後日談ですが、ボー爺さんは月琴を弾きながらあちこちに出演してすっかり人気者になりました。

皆さんが台湾に行けば、きっとボー爺さんに出会うでしょう。



※試写会概要

台湾映画『海角七号 君想う、国境の南』

——日本公開に先立つ早稲田大学での試写会参加記——

日時： 平成21年12月16日(水) 16:30~19:30

場所： 早稲田大学22号館201教室 ※早稲田大学学生を対象

主催： 早稲田大学アジア研究機構台湾研究所

共催： 早稲田大学オープン教育センター《台湾テーマスタディ》、日台稲門会

解説： 映画監督 酒井充子氏 (映画「台湾人生」を監督・製作)

今回解説を務められた酒井充子監督の作品「台湾人生」が、2009年 第83回キネマ旬報日本映画50位に入りました。文化映画に括られることの多いドキュメンタリー作品では、非常に珍しいことです。なお「台湾人生」のDVDが発売になりました。詳細は次のホームページをご参照下さい。 <http://www.maxam.jp>

台湾関連の文化映画では、2007年に「出草之歌 台湾原住民の呐喊 背山一戦」(井上修監督)、2008年に「緑の海平線～台湾少年工の物語～」(郭虎吟監督)がありました。「靖国」(李櫻監督)も文化映画枠です。

平成22年新年会（講演会・懇親会）開催される

（平成22年2月13日（土）17:00～ 講演会、22号館5階502教室
18:30～ 懇親会、大隈会館「楠亭」）

今年の新年会は、ゲストスピーカーに元台湾三井物産董事長兼総経理の高寛（たか ゆたか）氏をお迎えし「世界の潮流と東アジア構想に於ける、日・台・中の立つ位置」と題しての講演会と、大隈会館の教職員レストラン「楠亭」での懇親会の2部構成で行われた。

講演中の高講師



高講師の講演は、世界を股にかけた経済人としての立場で日中台それぞれの長期的展望から説き起こし、新興国の中国と付き合うにはどうするか、日本企業はどのように戦略を立てるべきかを解説したもの。良いものしか作れない日本は、東アジア生産ネットワークを構築し、台湾との国際分業を行うことにより活力を取り戻すことができる。増量経済化の進む中国では中規模都市のボリュームゾーンを狙うべきであるという。

講演は、パワーポイントを駆使した内容の深いものであった。内容については会報でも報告する予定。

（高講師は岩永会長の駐在時代のライバルだそうです）

が、この講演を機に、当会への入会を希望されました。）

講演終了後は会場を「楠亭」に移し、懇親会が盛大に行われた。司会の興石幹事の名調子により、会員の西脇さん（ボニージャックス）や新会員の西本さん（幹事候補）に始まり、主だった出席者が次々と紹介された。「な〜るほど・台湾」（これを入手するため六条通りに通った駐在員は数知れず）元編集長・現顧問の梶山憲一さん、日本企業の良きパートナー萬国法律事務所から留学中の胡元禎さん、スポ科博士課程在籍中の林勝龍さんと奥様の鄧夏君さん、ご子息の林紀里くん、岩永ゼミの赤松友美さん、松原蘭女さん、劉翰吉君、会員予備軍の松尾淳一郎君、それに総会司会でお馴染みの丸山幹事ご息女の香をりさん、等々多士済々であった。（幹事・齋藤記）



第1回早慶ゴルフ対抗戦

（平成21年10月26日（月） 習志野カントリークラブ）

台北では早慶戦ゴルフ大会が年2回（6月、11月）開催され、平成21年11月で36回と約18年の歴史を誇っている。

当会岩永会長、三田会飯沼さんの帰国を機に日本でも日台早慶戦ゴルフをやろうという機運が高まり、昨年10月26日（月）習志野カントリークラブで第一回大会を開催することにこぎつけ、両校8名の有志が当日参集した。

生憎当日は朝から強い雨が降り続き、両校参加者の

闘志に水を差し、参加者全員の話し合いで結局はドローとなった。

折角集まったのだからというわけで、今後の開催方法などを話し合い岩永会長行きつけのフランス料理店で昼食を共にし、次回の再会を期し散会した。

今年の開催日や開催要領は以下の通り決まりました。近くなりましたら事務局よりご案内を差し上げますので、会員の皆様是非参加下さい。（事務局・小野間記）

「開催要領」

1. 開催日：年2回開催
・5月17日（月）習志野カントリークラブ
・11月15日（月）会場未定
2. 参加者：両校8名、計16名（4組）程度を目標
3. 参加資格：リタイア組、現役組どちらも可。台湾からの参加も可。
4. 表彰：個人戦（ペリア方式）、団体戦（上位4名のグロス計）
5. プレー終了後近くのお店で表彰式と懇親会を実施する。

以上

◇ 会 合 予 告 ◇

『第14回日台稲門会定期総会・第11回日台交流の集い』のご案内

日 時：平成22年5月15日（土）
定期総会 15:00～15:40
講 演 会 16:00～16:50
日台交流の集い 17:00～19:00

会場：大隈会館2階
講演会：台北駐日経済文化代表處・馮寄台代表
※講演会・日台交流の集いには会員以外の方も参加できますので、奮ってご参加ください

◇ 新会員・会友紹介 ◇

新 会 員

西本 誠（にしもと まこと）さん。

和歌山県出身。昭和58年（1983年）商学部卒業 第一勧業銀行（当時）駐在員として、1992～1998年 台北・高雄に駐在したのが台湾との関係、校友による「草の根の日台交流」の輪に加えて頂きたく、入会致しました。「高雄稲門会OB会」にも所属しています。タイセイ・インターナショナルに勤務。よろしくお願ひ申し上げます。

渡邊 義典（わたなべ よしのり）さん。

昭和38年政経学部政治学科卒業 69歳 1983～1988年 1回目の台湾駐在。帰国後「関東台湾稲門会（日台稲門会の前身）」の設立総会に参加。設立発起人は湾生が中心で、一番若い私は幹事長を仰せつかりました。財政難の会は四苦八苦、ともに事務局を担当した高橋会計事務所の高橋さんがかなりの資金を立て替えてくださいました。

2000～2009年まで2度目の台湾で、台湾生活を満喫しました。台北稲門会、高雄稲門会に参加し、更には台湾校友会総幹事の会社にお世話になり、その事務局をお手伝いさせていただきました。

通算15年近くを過ごした台湾は私の第2の故郷です。これからはお世話になった台湾に恩返しが少しでも出来るように頑張る所存です。日台稲門会に帰り新参ですがよろしくお願ひいたします。

鈴木 靖章（すずき やすあき）さん

入会の動機：早大の一関係者として台湾との交流を持ちたい

山下 聰（やました さとし）さん

四国は愛媛県宇和町出身。昭和50年政経学部経済学科卒業 2005年11月から約4年間台湾に赴任し昨年6月に帰国（台湾三菱電機董事長、工商会理事）。現在、菱電商事株勤務。

台湾へは、6年間のドイツ駐在から10年近い年月が流れた後の海外生活でした。異文化との対立、そして自立であったドイツ生活とは対照的に、台湾では新たな異文化の中での暮らしであっても、何か居心地のいい4年間でした。台湾に行ってから知ったことですが、約1世紀前に日本から台湾への入植者第一陣が花蓮に到着したとき、一行の中に現在の愛媛県出身者が比較的多かったそうです。居心地の良さは、私自身も何か台湾と縁があり、また人生の必然で台湾生活があったと今では確信しています。一方で、帰国後新たな日本の生活、また新たな会社生活の中で台湾との接点が希薄になりつつあり、何か台湾とつながりを持ち続けたいとの思いで入会いたしました。

趣味は40歳から始めたテニス。ただただ健康に良いと信じてシニアテニスを続けております。

退 会 会 員

大島 正克さん（11月27日付）、荳司 真恵さん（1月18日付）

台湾留学生会の会長・副会長選挙結果

早稲田大学台湾同学会の曾さんから、台湾留学生会正副会長選挙の結果報告がありましたので紹介します。

有権者数：150人 投票人数：47人（1人海外投票含む） 投票率：31.3%

開票結果：1.楊 司弘 / 李 侑桂 16票 34.0% 2.王 芄 / 沈 千芄 4票 29.7%

3.洪 珮瑜 / 李 心寧 17票 36.2%（当選）

洪 珮瑜 / 李 心寧候補が当選し、4月1日から会長 / 副会長に就任します。今までご愛護をいただき、誠にありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

◇ 台北稲門会便り ◇

「台北事務所三年目に向けて」

早稲田大学台北国際交流センター 岡本宏一

二〇〇八年七月に事務所を開設して以来の日常的な活動内容について本誌第十二号に紹介させていただきましたが、その後も継続的にいろいろな業務が発生している中で、特筆すべき事項二件と個人的な出来事をご紹介しますと思います。

◇頂新国際集団奨学金

大手食品企業である頂新国際集団が中国、台湾に対する感謝の意味を込めて優秀な学生に奨学金を提供して早稲田大学で学んで欲しいと、奨学資金を提供くださることとなり、昨年十月二十一日に上海で記者発表を行いました。初年度は早稲田大学の協定校のうち、中国の五大学、台湾の二大学の学生に対して、厳しい条件のもと、早稲田大学の大学院に合格した合計四十人の授業料と

生活費を給付するものです。二年度以降、規模を拡大する予定ですが、この奨学生の第一号に台湾大学から大学院文学研究科に合格した学生が決まりました。引き続き三月にかけて多くの大学院の発表がありますので、第一号に続いて台湾から一人でも多くの学生が採用されることを願っています。

◇基金会と日本語教育

日常業務が軌道に乗ってきたことから、次のステップとして、自助運営できる組織にすることが必要です。その為には当初予定の基金会の設立に加えて事業を展開しなければなりません、タイのバンコクでの日本語学校の成功事例を活用して台湾で日本語学校を開校できないかと考えています。台湾にはタイよりもはるかに上

回る数の日本語教育機関があり、日本語学習者も多いことから普通の日本語学校では限界があるでしょう。早稲田大学別科日本語専修に対する台湾の多くのニーズを分析しながら、場所、運営資金、プログラム、講師陣などをかみ合わせながら第一歩をどう歩みだすか、三年目に向けて方向固めをしたいと考えています。

◇人生初めての入院

最後に、五十歳を目前にして急性盲腸炎で一月二十九日に入院しました。家族の中で誰も盲腸の手術をした者はいませんので、耳を疑いましたがCTスキャンの診断結果、盲腸が破裂していて腹膜炎の恐れがあるということで手術をしました。三日間の入院でしたが、台湾校友会、新光グループ、同志社大学台湾事務所、在学生父母

等関係者がお見舞いに来てくださり、人のありがたみを感じました。特に在学生の父母がわざわざ魚と蛤のスープとお粥を作ってもってきてくださったことは、私の仕事上でも、信頼関係が築きあげられていることの証と思いました。(2010. 2. 7 記)

◇ 台湾関連書籍 ◇

「宋家王朝 (上・下)」スターリング・シーグレーブ・著／田畑光永・訳 岩波現代文庫 社会 196

「私は、なぜ日本国民となったのか」金美齢・著 WAC BUNCO

「台湾鉄路と日本人一線路に刻まれた日本の軌跡」片倉佳史・著 交通新聞社新書 013

会報で詳しく紹介します。

編集後記

バンクーバーオリンピックの開会式で、「Taipei Cinoi, Chinese Taipei!」のアナウンスとともに台湾スノーボード、リュージュに出場する選手2名が入場した。国力から考えるとチト寂しい気がした。台湾、加油!

さて、模索しながら始まった当会の経済・文化活動も次第に充実してきた(と思う)。総数は相変わらず増えないが、ユニークな会員の入会もあり、各方面とのパイプも太くなっている。今号の記事を顧みても、台湾校友会、台北稲門会、大学・台湾研究所(幹事会は22号館を使わせて頂いている)との絆はいうまでもなく、宿敵慶應義塾との交流も活発になった。また、5月の定時総会には台北駐日経済文化代表處・馮寄台代表をお招きし、ご講演を頂く。

これら財産をどうやって会費を納めて頂いている会員に還元してゆくかが課題。台湾大好きな会員の皆さんには、当会をさらに利用されることを望みます。会報にも是非皆さんの声を投稿してください。(編集士・斎藤)